

書籍紹介



城山三郎 著
新潮文庫

『官僚たちの夏』



有名な作家の、有名な作品ですので、今さら敢えてという感もありますが、官僚たちの夏を紹介します。昭和30年代の通産省を舞台とした城山三郎の小説で、主人公の風越は、特許庁長官も務め、事務次官にもなった佐橋滋をモデルとしています。映像化もされていて、最近では2009年に放映されたTBS系列のテレビドラマ（主演は佐藤浩市）がDVD化されているので、機会があれば併せてご覧ください。

物語は風越が秘書課長の時代から始まる。同期のライバルである玉木はワシントン大使館付として出向している。風越が有能と見込む若手の庭野は法令審査委員会のメンバーとして活躍する一方、庭野と同期の片山は、入省時には秀才中の秀才と注目されながら、その後はパッとせず、カナダへ通商担当の書記官として出向する。

池内大臣（モデルは池田勇人）の就任に伴い、大臣秘書官に庭野が抜擢され、庭野は「無定量・無際限」に働く。風越は重工業局長に、玉木は繊維局長に昇進している。原綿原毛自由化について、国内産業の保護育成を優先する「産業派」「民族派」の風越と、通商貿易を重視する「通商派」「国際派」の玉木は激しく対立する。

その後、風越は企業局長、玉木は通商局長となる。風越は官民協調行政を推進するため、産業資金課長に庭野を抜擢する。指定産業振興法の成立に向けて、再び風越と玉木は対立する。そのような中、須藤大臣（モデルは佐藤栄作）が就任し、大臣秘書官に片山が抜擢される。「秘書官というのは、無定量・無際限に働くものだ」と主張する庭野に対し、片山は「ご冗談でしょう」と返す。その後、指定産業振興法の足がかりとなる予算の獲得はならなかったが、玉木は特許庁長官に転出する。

風越は企業局長に留任。古畑大臣の下、振興法の成立に奔走するが、官庁間の権限争議に難航する。振興法は閣議

決定されるも審議に至らず、国会の閉会に伴い審議未了で廃案となる。玉木が事務次官となり、風越は特許庁長官に転出する。

風越は特許庁長官として審査処理能力拡大のための予算獲得に積極的に取り組み、それを実現させた。そして、玉木の退官に伴い、事務次官に風越が就任するが……

ここで、昭和38年当時の特技懇誌20号には、佐橋長官が執筆した記事が掲載されていて、「特許についてははずぶの素人だし、これから特許法の勉強をしようとも思わない」と放言する一方で、「在任中長官としてやらなければならないことは必ず全力を尽くしてやる」という趣旨の就任挨拶をしたことが記載されており、このエピソードは本著でも取り上げられています。また、同記事において、人員増に伴う審査スペースの確保が必要ということで、新庁舎建設のための予算がついたと記載されているのですが、実際の新庁舎建設は、1989年（平成元年）まで実現しませんでした（このあたりの経緯は特技懇誌 238号「特許庁オフィスの見直し」(<http://www.tokugikon.jp/gikonshi/238kiko2L.pdf>) などをご参照ください。)

入省同期の風越と玉木は通産省の出世レースを争い、また信念の違いから激しく対立しますが、国を良くしていきたいという思いは共通しています。また、同じく同期の庭野と片山の働き方の違いについても興味深く思っています。

風越は「ミスター通産省」と呼ばれるほどのカリスマ性を発揮します。最後にいささか脱線しますが、「ミスター特許庁」を主人公とした小説が出版されることを夢想しながら、本稿の締めといたします。

紹介者 審査第三部 金属電気化学 竹口 泰裕